

第六回

教育相談の「技」(一)
援助的コミュニケーションとしての
教育相談・生徒指導



西村 淳平

文教大学教育学部准教授

前号まで四回にわたって、教育相談や生徒指導の見方や考え方について、主にアドラー心理学の立場から述べた。

本号と次号では、教育相談や生徒指導のスキルに焦点を当てることとしたい。

一 教師だからできるカウンセリング

学校における教育相談のあり方については、従来からさまざまな議論が行われてきた。特に、中学校にスクールカウンセラーが入り、今年度からはスクールソーシャルワーカー活用事業がスタートしたことからその役割分担について活発な議論がわき起こることが期待される。

しかし、学校教育の主たる担い手が教師である以上、教育相談についても、教師による教育相談やカウンセリングのあり方が模索されなければならない。

その点で興味深い示唆を行っているのが、

心理臨床家の吉本武史氏である。吉本氏は次のように述べている。

児童生徒の心のケアを考えると、教師はいつでもカウンセラーにならなければいけないでしょうか？ そんなことは決してありません。いやむしろ、カウンセラーにはできない、教師ならではの効果的なかかわり方があるはず。 (中略) 皆さんはわざわざ「カウンセリング」的な心のケアをする必要はないのです。児童や生徒との間によりコミュニケーションを持っていただくこと、児童や生徒がそのことで、安心感がもて、かつ自尊心とともに意欲がもてるような、そんな援助的なコミュニケーションを築くことができる。実は、それがそのまま「カウンセリング」がめざしている援助の目的のものになっています。

つまり、吉本氏は、教師だからできるカウンセリングとは「援助的コミュニケーション」そのものだと指摘している。筆者も吉本氏の考えに全面的に賛同するものである。

二 援助的コミュニケーションとは

吉本氏はさらに、教師による援助的コミュニケーションのスキルを六点にわたって紹介している。それらを筆者なりに四点にアレンジして述べてみたい。

(一) チューニング

チューニングとは、相手とさまざまな面で波長を合わせることであり、ペーシングと呼ばれることも多い。近年、教育、医療、福祉などの対人援助はもとより、接客や販売などビジネス場面も含め、相手とラポール(信頼関係)を築くための基本的なスキルとして指摘されることが少なくない。

ラポールが築かれている二人を観察すると、動作、姿勢、表情などが自然に相手と合っていることが観察される。したがって、こちら側(援助者、教師)からやや意図的に相手(被援助者、児童生徒)に合わせるいくことで、より効果的にラポールを築く

ことができるのである。

(二)傾聴

カウンセリングの基本中の基本が傾聴にあることを疑う者はいないであろう。しかし、傾聴はカウンセリングの基礎にとどまらず、コミュニケーションの基礎とも言えるものである。その証拠に、人間関係における「聞く力」の重要性を指摘する本は枚挙にいとまがない。

ところで、今年三月に告示された新しい学習指導要領では「言語活動の充実」が謳われているが、中教審初等中等教育分科会長の梶田叡一氏は、これからの教育で重視されるべき言語活動の第一として、「傾聴の態度と能力を育てる指導」を挙げている。

すべての教師は、子どもに対する援助的コミュニケーションの手段としてだけではなく、子どもが「言葉の力」をはぐくむための範となるためにも、傾聴のスキルを磨くべきである。

(三)ポジティブなメッセージ

前号で述べた「勇気づけ」は、具体的にはポジティブなメッセージとして表現されるであろう。たとえば、相手を勇気づけるメッセージとして、ぜひ次の三つの言葉を

日常生活の中で頻繁に用いたい。

①「ありがとう」

言うまでもなく感謝の言葉である。相手が年少の子どもであっても、しっかりとこの言葉で感謝の気持ちを伝えたい。

②「うれしい」

感謝の言葉とともに、相手との間に親和的な関係を築く助けとなるのが、肯定的な感情を伝えるこの言葉である。

③「助かった」

特に相手の貢献に感謝する言葉である。アドラー心理学では、他者への貢献が我々が目指すべき人間関係の重要な要素であると考えている。

(四)フレミング

「枠組み(フレーム)を変える」ことから、「見方を変える」の意味で用いられる。近年、構成的グループエンカウンター等の心理教育的アプローチにおいて、「短所を長所に」などのエクササイズとしてしばしば用いられるようになった。

リフレミングが活きるのは、子どものリソース(次号参照)を探す時である。たとえば、「落ち着かない」子には、「活発」「エネルギーシユ」「反応が早い」などのリ

ソースが存在すると考えられる。

三「注意に注意」

援助的コミュニケーションは、いわゆる生徒指導の場面でも活かされなければならぬ。

中学校現場で長年生徒指導に取り組んだ故・家本芳郎氏は、「注意に注意」と述べている。日本の教師は、明治以来、注意以外の指導技術を磨いてこなかったのではないかと、言うのである。そして、注意以外の指導のバリエーションを広げること、ユーモアの活用を提案している。これらは、次号で述べるブリーフセラピーの発想とも軌を一にするものである。

援助的コミュニケーションのスキルを磨くために、教師にはカウンセリングの学習を勧めたい。

〈参考文献〉

吉本武史(編著)『教師だからできる五分間カウンセリング』学陽書房
家本芳郎『イラストでみる楽しい「指導」入門』高文研